

第六十四回 京都観世能

文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

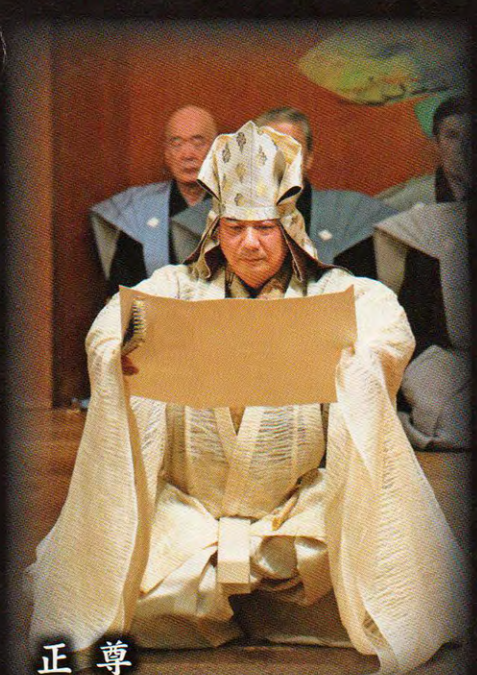


養老



三輪

令和4年10月23日（日）
午前11時始（10時開場）
京都観世会館（京都市左京区岡崎円勝寺町44）



正尊

ご予約・お問合せ **京都観世会館**

TEL. 075-771-6114

<http://www.kyoto-kanze.jp>



チケット販売サイト

++++ 入場券 9月1日(木)午前9時発売 +++++

S	席（1階正面指定席）	12,000円
A	席（1階脇正面中正面指定席）	10,000円
B	席（一般2階自由席）	6,000円
学	生（2階自由席のみ）	3,500円

主催 公益社団法人 京都観世会

第六十四回 京都観世能

令和四年十月二十三日(日) 午前十一時始

樵夫 松野 浩行

天女 吉田 篤史

樵翁 山神 林 宗一郎

養老 水波之伝

勅使 從者 岡 有松 遼一 充 陸

石井 景之 前川 光範
曾和 鼓堂 杉 信太郎

茶壺

(狂言) すっぱ 茂山あきら

中国方の者 目代 茂山忠三郎 茂山 逸平

休憩二十分

(一時十五分頃)

里女 三輪明神 片山 伸吾

三輪

白式神神楽 玄賓僧都 宝生 欣哉

間 里人 茂山 茂

河村 大 前川 光長
吉阪 一郎 杉 市和

休憩十五分

(後見)

河村 晴久
杉浦 豊彦

(地謡)

寺澤 拓海 浦部 幸裕
河村浩太郎 浦田 保親
宮本 茂樹 大江又三郎
田茂井廣道 越賀 隆之

(後見)

大江 信行
青木 道喜

(地謡)

樹下 千慧 橋本 忠樹
河村 和晃 味方 玄
河村 和貴 片山九郎右衛門
梅田 嘉宏 分林 道治

(後見) 増田 浩紀

(仕舞)

俊成忠度キリ 宮本 茂樹
松 風 杉浦 豊彦
花 筐 クルイ 片山九郎右衛門
天 鼓 田茂井廣道

(四時頃)

義経 味方 團
静 吉浪 咲紀
江田 大江 広祐
熊井 大江 泰正
士佐坊正尊 吉浪 壽晃

正 尊

起請文 武蔵坊弁慶 福王 知登
翔入 間 侍女 茂山千之丞
谷口 正壽 井上 敬介
林 吉兵衛 森田 保美

姉和 深野 貴彦
立衆 河村 和貴
河村浩太郎
河村 和晃
樹下 千慧
寺澤 拓海

附 祝 言

(終了予定 五時頃)

(後見)

橋本 光史
橋本 雅夫

(地謡)

谷 弘之助 河村 晴道
松野 浩行 浦田 保浩
吉田 篤史 井上 裕久
大江 信行 古橋 正邦

(地謡)

橋本 忠樹
橋本 擴三郎
武田 邦弘
河村 博重

養老 水波之伝 世阿弥作の神能。

雄略天皇の昔、美濃国(現岐阜県)本巢の郡に不老不死の薬の水が湧き出る由を聞かれた帝は、勅使を遣わす。勅使が本巢の養老の滝に着くと、薬の水を見つけた親子の者に行き会う。親子の者は勅使の問いに答えて、その経緯を語る。

孝行者の息子は毎日山に入り薪を採り、老父母を養っていた。あるとき、ふと滝の側より湧き出る泉の水を飲む。すると忽ち疲れも消え、活力が満ちた。これを汲み帰り父母に飲ますと、老を忘れ若い。その泉の在り処を勅使に教え、薬の水のありがたさを中国の故事などを引いて語る。勅使は喜び、この由を帝に奏上するため帰ろうとすると、天より光が差し、音楽が聞こえ、花が降り、ただごとと思えぬ様子となる。——中入——

やがて天女の姿の楊柳観音菩薩が現れて舞を舞い、次いで山神が出現し、豪壮に舞い、治まる御代を寿ぐ。

「水波之伝」の小書(特殊演出)では、中入の地謡で前シテはすぐ中入し、前ツレが情景描写を受け持つ。そして「来序」を踏んでツレも入幕すると、間狂言は無く、すぐに「出端」になって楊柳観音の降臨となる。舞を舞い、薬の水の奇瑞を讃えると、黒頭に芍薬の花を戴き、目に金具を嵌めた「三日月」系統の面をかけた山神が荒ぶる神の風情で現れ、急調の舞を舞う。間狂言が無いので、自然シテは早装束(前後の装束を短時間で替える)となる。ツレの舞の途中、半幕(揚幕が半分だけ巻き上げられる)でシテが姿を見せるが、これは舞台面の演出だけではない。「サイン」も含まれている。「神舞」は悉く替の型で舞い行き、最後の段で、笛が水に縁の盤渉(高い調子)に上がる。水の印象を強めて舞い上げ、続く「立廻」で橋掛りへ行き、滝を見上げ流れを追う。水また水の演出である。

神と仏を水波の隔て(隔てのないもの)と捉えるのは、近代以前は自然な思想であり、日本の文化のおおらかさの象徴のようにも見える。

前段では人間の視点から水の徳を讃え、後段では神仏がこれを賛美する。水の清らかさをもって、世界の平和と万民の幸福を祈る祝言曲である。

三輪 白式神楽 大和国(現奈良県)の三輪山の麓に庵を結び、閑居する僧があった。玄賓僧都と云う。僧都のもとへ、毎日桶と悶伽の水を運ぶ女がいた。

秋の夜寒のためとて、女が衣を所望すると、僧都は快く与える。受衣を謝し、衣を抱いて帰ろうとする女を呼び止め、僧都は住処を尋ねる。女は「三輪の山もとに、杉立てる門をしるしに尋ね給え」と言い捨てて消える。——中入——

僧都のもとへ日参する里の男が三輪明神に参ると、杉の神木の枝に僧都の衣が掛かっている。不審に思った男が僧都に尋ねると、先程女に与えた衣であることが分かる。僧都は草庵を出て三輪明神を訪ねると、なるほど女に与えた衣が掛かっている。三つの輪は清く淨きぞ唐衣

くると思ふな取ると思はじ。すると今度は神木より神の御声が聞こえる。「ちはやぶる神も願ひのある故に人の境遇にあふぞ嬉しき」。僧都が姿を現し給えと願うと、果して神体が現れる。そして三輪の神婚説話を語り、天照大神の岩戸隠れの神楽を再現し、伊勢と三輪の神は一体分身と説き、神の告は永遠化されてフイ

ナールとなる。

この度は「白式神楽」の小書で演じられる。片山家で創出された小書である。作り物は笛座の前に出され、ワキ、シテの出に重い習いがある。後シテは小書の名の通り、垂髪(おすべらかし)に、白地着付、白大口、白地狩衣と、白一色の装束になり、神々しい姿となる。常は巫女に神が憑く設定であるが、この小書では神本体が現れ、「神体あらたに見え給ふ」と明言する。袖を持ち、青竹で組まれた杉を表す作り物より出たシテは、「クセ」の後、岩戸隠れの神楽を真似ぶが、常の「神楽」ではなく、「イロエ」と「神楽」に分け、神性と高揚感を高める。

すべての芸能の根元と世阿弥が主張する岩戸隠れの神楽を、三輪明神が再現するこの曲は、古代の気をまといながら中世の神道論も体現し、近世近代の演出の昇華度の高さにまで及ぶ。能の進化の可能性が見えるようにも思われる。

正尊 起請文 翔入 平家を壇之浦に滅ぼした源義経は、朝廷の命により都を守護していた。しかし源平の合戦の折、梶原景時が提案した逆艦(舟首にも艦を付け、舟を後退させる工夫)の意見を義経が承引しなかった遺恨により、景時は「義経に謀叛の心あり」と頼朝に讒奏し、義経は窮地に立たされていた。そこへ鎌倉殿(頼朝)より義経暗殺のために送り込まれたのが、土佐坊正尊である。

正尊が都に着いたとの知らせが、義経のもとに届く。義経は弁慶を遣わし、正尊を即時に連れて来させる。そして、熊野参詣のための上洛と偽る正尊に、義経の討手であろうと詰問する。進退谷まった正尊は、自分の言葉に嘘偽りの無いことを神々に誓う「起請文」をその場で書き、義経の御前で読み上げる。その器容を認め、義経は正尊に盆を与え、静御前に酌をさせ、舞を舞わせる。場は一気に和らぎ、華やかさに包まれる。「頼朝と義経の兄弟の契りの変わらぬことは、神が知っておられるでしょう」と静に諫められ、正尊は宿所に帰る。——中入——

弁慶が正尊の宿所に偵察の者を送り込むと、案の定、正尊方は武装して、夜討ちの用意を整えていた。これを聞いた義経方も、応戦の用意をして待ち受ける。正尊方が討ち入ると、弁慶や江田源三や熊井太郎の働きで、正尊方の郎等は次々と討たれる。姉和乎次光景も、大将である正尊を討たせてはなるまいと進み出で、弁慶と戦うが、彼も斬られてしまう。数々の郎等を失った正尊は馬より下り立って乱れ入り、義経、静と切り合うが討つことは叶わず、弁慶と切り合い、組み合い、

終に組み負けて縄を懸けられ、引き立てられてゆく。

前段では、正尊と弁慶の知略と威圧の駆け引きの面白さや、虚起請を読み上げる正尊の神をも畏れぬしたたかさ、静の舞の可憐さと、見る者を飽きさせない。このような前場から盛り上げる演出は、音阿弥の子である小次郎信光以降の作者に多く、世阿弥や禅竹の凝縮した美意識とは別の魅力を求めたものであり、能の可能性を近世に継いだ一要因とも言えよう。

「起請文」の小書は、起請文そのものをシテが読み上げる演出であるが、これが常態となっている。また「翔入」は、「翔」を挿入して斬組に重点を置き、次々と郎等の討たれる様を見せる。しかし、その間幕前で床几に掛けて動かず、我が郎等が命を落としてゆく悲惨を耐えて見守る正尊の心中に、この曲のもう一つの主題があるのかもしれない。

(河村晴道)

京都観世会館アクセス



- ◆京都観世会館へは JR京都駅から 市バス [5] で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車(乗車時間約30分) 市地下鉄「烏丸御池」にて地下鉄東西線乗り換え「東山駅」下車(乗車時間約20分) 阪急京都河原町駅から 市バス [31] [46] [201] [203] で「東山仁王門」下車(乗車時間約15分) 京阪三条駅から 市バス [5] で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車(乗車時間約7分) 地下鉄東西線「東山駅」下車(乗車時間約1分) JR二条駅から 地下鉄東西線「東山駅」下車(乗車時間約8分) 山科・醍醐方面から 地下鉄東西線「東山駅」下車(乗車時間約9~17分) 地下鉄東西線「東山駅」下車 1 番出口から徒歩約5分 ◆会館東隣に有料駐車場(約20台)がございます。

◆新型コロナウイルス感染予防対策として、当館ではアルコール消毒液の設置や、多くのお客様が触れる箇所は定期的に清掃・消毒を行っております。◆入場の際には、「検温」「手指消毒」「マスク着用」「芳名票記入」のご協力をお願い申し上げます。◆発熱・咳など風邪症状や倦怠感など体調が優れない場合は、ご来館前に医療機関にご相談願います。◆字幕解説サービス(和・英文対応)をご利用いただけます。(千円/予約可) ◆上演中の客席へのお出入りはご遠慮ください。◆事務局で許可した方以外の写真撮影・録音・録画は固くお断りいたします。◆上演中は、携帯電話の呼出音を切り、スマートフォン等の画面が光らないようご注意ください。◆今後の状況により、出演者・内容等が変更になる場合がございますので、予めご了承ください。

【表紙写真】《養老》林 宗一郎 (金の星渡辺写真場 撮影) 《三輪》片山 伸吾 (金の星渡辺写真場 撮影) 《正尊》井上 裕久 (金の星渡辺写真場 撮影)